

No.329

理研会報

9月21日(金)に、平成19年度印旛郡市理科作品展の審査会が、印旛教育会館で行われました。本号では、22日(土)の一般公開の様子と、審査に携わった先生方からの講評について掲載いたします。

理科作品展の様子



9月22日(土)の一般公開日には、運動会を実施している学校もありましたが、250名近くの来館者がありました。家族連れも多く、300点を超える優秀な作品を前に、「すごいなあ」という感想も多く聞かれました。なお、郡の審査会で金賞に輝いた児童・生徒の作品は、印旛地区理科研究部のホームページでも掲載しておりますので、是非、ご覧下さい。

郡理科作品展審査の様子

9月21日(金)は、郡理科作品の審査会を開催しました。運動会等の行事で忙しい時期ではありましたが、多くの先生方が時間をかけて慎重に議論し、審査していただきました。



審査の講評:工夫作品の部

<小学校工夫作品の部>

阿部 猛 先生 (成田市立公津の杜小学校)

毎年楽しみな工作部門の審査ですが、今年度も審査員一同、童心に返って楽しく審査させていただきました。

ゴムの弾性や磁石の反発、モーターやその振動、リニアなどを利用した「動く工作」が中心で、審査員全員がその動きに思わず声を上げる作品もありました。また、学校での既習学習を発展させた作品も多く、中には今すぐ商品化できるのではないかと作品もありました。

いずれにしても、アイデアを考え、道具を使って作品を作るということは多くのエネルギーがいることです。とかく「理科離れ」が叫ばれていますが、作品展に出品された作品を見る限り、心配はいらなと感じました。来年もたくさん科学工夫工作が出品されることを期待しています。

<中学校工夫作品の部>

大坊 孝志 先生 (印西市立小林中学校)

科学工夫作品は、すぐにでも生活に活用できるような「生活部門」と文字通り「科学工夫作品」に二分することができます。このどちらにも言えることですが、今回の作品は、インターネットや本、TVで紹介されたものの追試が多いように感じました。

「独創性」「独自性」を追求していくためには、日頃から生活者としての目線、先行研究をさらに一歩進める発想力、そして溢れる情報を活用する力が必要であり、また、授業以外でも生活経験を向上させ、日常の現象を科学の言葉で説明していくことが大切だと思います。そのためにも、日頃から生徒に「なぜ」「どうして」を大切に問いかけ、考えさせていくことが不可欠ではないでしょうか。

審査の講評：論文の部

<小学校論文の部>

江村 司 先生（成田市立成田小学校）

各部会の審査を経た作品を集めての本審査は、どの作品も力作揃いの中で慎重に進められました。審査の観点は、次の4点で行いました。

- ① 自然科学を対象としたものか
- ② 着想が新しいか
- ③ 研究努力が積まれているか
- ④ 学年にふさわしいものか

審査の結果、金賞に選ばれた作品は、研究の目的（何を疑問に思い、明らかにしたいのか）に向かって様々な方法で、地道に努力を積んでいるものでした。子どもたちの「理科離れ」が進んでいるといわれる中で、出品作品を見る限り、その質の高さを感じ、頼もしく思いました。

今後も自然科学に興味関心を持ち、自ら探求しようとする子どもたちが増えることを願ってやみません。

<中学校論文の部>

竹内 一浩 先生（佐倉市立志津中学校）

1年生では身近なことや、地域のことから題材をとって調べていることが多く、着想もおもしろい研究が多くありました。ただ、論文として完成させるためには仮説や予想をしっかり立てて、自分の知りたいことを深められるように研究を進めると良いと思われます。

2年生では着想面ではありふれたものが多かったという印象です。しかし、研究を計画的に進め大変努力しているものも多く、考察の部分はやや弱いものの、年々平均レベルは上がっており、見やすい作品も増えてきています。

3年生では出品数は少ないものの最上級生としての意地を見せていました。6年間に渡り調査したものや、10センチメートル以上の厚さの論文もありました。

実験では仮説に対する考察は、どの学年でもまだ弱いです。「考える力、考えていく力」を今後どのように育てていくかが我々の課題です。

審査の講評：標本の部

<小学校標本の部>

吉野 信之 先生（印西市立西の原小学校）

出品された標本は、植物16、昆虫17、貝9、化石5、土・石・炭5の52作品でした。

作品の特徴として、①箱や台紙への分類の仕方が工夫されている、②「庭の〇〇」のように採集目的を考えている、③生態の研究など学習に生きる作品が増えているなど、理科標本としての価値が高まっていると感じました。

さらに、羽や腹の処理や展翅（昆虫）、水分を残さない押し（植物）、分類の仕方が丁寧な作品などが金賞に選出されています。

土や樹皮の標本など、児童の興味・関心の広がりを感じる本年度の作品展審査でした。

<中学校標本の部>

松田 治久 先生（白井桜台中学校）

関西地方を主な生息域としているクマゼミが関東でも発見されるという話題がこの夏に報じられ、子どもたちの作品の中にもクマゼミの姿が見られました。セミに詳しい方の話によると、一般にセミの羽は透明で、アブラゼミのように茶色い羽は珍しいとのことでした。クマゼミの羽は透明で、体もアブラゼミより1回り大きく立派です。採取した千葉育ちのこどもは「ヤッタ！」と思ったことでしょう。

ところで、夏期作品展で昆虫標本が少なくなってきたように思います。麦わら帽子に捕虫網を持って野山をかけまわることもちが少なくなったのでしょうか。夏になると文房具屋さんには白い捕虫網や「昆虫採集セット」が必ずあったのですが最近はどうなのでしょう。ゲームやネット検索に使う時間を少なくし、野外で生きた生物に触れる機会を多くしてほしいものです。

印旛地区理科研究部ホームページアドレス
<http://rikainba.or.tv>